



駿府と今川氏

第6回

北条早雲の駿府今川館襲撃

小鹿新五郎範満が
家督代行となる

今川義忠の突然の死によって、今川家中は大混乱に陥った。

「六歳の幼児でも周りが盛り立てていけば大丈夫」という派もあれば、「一族からしかるべき者を選んであとを継がせるべきだ」という声も上がり、一族の小鹿新五郎範満を推す派も現れた。この小鹿氏というのは、連載第四回のところでも触れた今川一門小鹿氏である。

このとき、幼君今川龍王丸の叔父にあたる北条早雲が分裂気味の両派の間に割って入り、一つの折衷案を示している。それは、「龍王丸が成人するまでの間、小鹿範満に家督代行を務めてもらおう」というものであった。

両派これに納得し、争いには至らず、龍王丸はひとまず駿府今川館を出て、そのあとに小鹿新五郎範満が入った。

そして、そのあと、北条早雲、すなわち伊勢新九郎盛時は駿府を離れ、京都に戻り、幕府の申次衆という職についているのである。

密かに駿府に
舞い戻った早雲

仮に、このまま小鹿範満が龍王丸の成人を待つて家督を戻していれば、早雲は申次衆を続け、京都で平穏な余生を送ったはずである。

ところが、長享元年（二四八七）になって、駿府にいた妹の北川殿から、「龍王丸が元服する年齢になったのに、小鹿範満は家督を戻そうとしない」という連絡が早雲のもとに入った。要するに、小鹿範満が、そのまま今川家の家督の座に就き続けようだというのである。

こうしたときの早雲の行動は実に素早い。密かに駿府に戻り、龍王丸擁立派の人々と連絡を取りつつ、同年十一月九日、同士たちと駿府今川館を急襲し、小鹿範満を討ち倒しているのである。

なお、早雲による今川館奇襲の日を同年十一月九日としたのは、その直前に、



▲龍王丸を擁護した北条早雲

島田の東光寺に対し、龍王丸の名で寺社勢力を味方につける工作が行われていたことが明らかなのと、静岡市長田の得願寺の過去帳に、

大慈院殿欽山喜公大禪定門

霜月九日

小鹿殿ノ事

とあることによっている。

こうして、龍王丸は、叔父北条早雲の尽力によって今川家七代目の家督を継ぐことができ、元服して氏親と名乗っている。

ちなみに、早雲は京都には戻らず、今川氏の支配力が弱い駿河東部支配のため、駿東郡の興国寺城に入っているのである。